



長い長い悪夢

すずき ようこ
鈴木 庸子 ●イタリア語通訳 翻訳家

2020年3月10日から約2ヶ月、全土でロックダウンが敷かれたイタリア。あの光のない冬から、1年が経とうとしている。

春めいてきた先日、ロックダウン以来会えずにいたイタリア在住のイギリス人の友人が、トンネルに突入しようとした1年前の空気をまざまざと甦らせる実体験を語ってくれた。元気な本人を前にし、今だから笑えるが、渦中にあった1年前の彼女と御家族の心中は、察して余りある。何より、大きな心配事は未だに解決できていない。

.....

「元気だった？そうそう、ブレクジットおめでとう！」

「もう!! まあ、私も今年から、非ヨーロッパ人カテゴリーの末席を汚させてもらうことになったんで、宜しくね。コロナのワクチンってさ、我々みたいな『非』にも、この国は恵んでくれるかしら？」

「接種が一番進んでるお国に一時帰国するっていう奥の手のある人が、何言ってるの。その点、ロンドンのお母様は安心だね。彼女、お元気？ 去年1月に、こっちで腰の手術したよね？」

「うん、元気は元気なんだけど、異国の島で、もう1年近く1人暮らしなの」

「は？」

「私の悪夢のネバー・エンディング・ストーリー、聞いて！」

母、術後の経過がすごく良好で、去年の2月後半にはリハビリも終了したんだけど、その頃、北イタリアのコロナの雲行きが怪しくなったじゃない？ この国が、ヨーロッパ唯一のコロナの巣窟みたいな雰囲気になって来たから、私たちは南部だけど、変なとぼっちりでイタリアからロンドンに帰れなくなったりしたらまずいってことで、彼女が居住権持ってるスペインのカナリア諸島に動いておいて、暖かいところで養生してから、ロンドンに戻ってもらおう、ってことにしたのね。私は実家までお供して、ナポリに戻る予定だったの。で、3月頭の大西洋で、母娘仲良く甲羅干ししてたら、うちの夫から電話が来てさ。開口一番『ロンドン発ナポリ行きの君の便、欠航になったよ！ 君たちが発ってから、こっちのコロナの状況が一気に深刻化してて、どこの航空会社もイタリア発着便、がんがんキャンセルしてるの！ コロナがヨーロッパに広がるのは時間の問題だから、島なんか居たら、あつという間に身動きとれなくなっちゃう。早くそこから動いて！ 今取れる便のリストすぐ送るけど、きっと早い者勝ちだし、取ったってキャンセルになるかもしれないし、どれ

でもいいから今押さえて！ ドイツでもフランスでも、とりあえず大陸に戻れば、レンタカーって手があるし、何なら迎えに行くから、とにかく早く！』って叫ばれて。何が何だか分からないままネットで確認したら、本当に、イタリア発着の飛行機がごっそり欠航になって、ロンドン発の私の便もその一つだったの。80代の母を異国に1人で残すのはすごい心残りだったんだけど、夫の声があまりに切羽詰まっていたから、一応その場で翌日のパリ行きを押さえたのね。その時は知る由もなかったんだけど、結果的にはこれが、このシーズンこの島から最後のパリ便になったのよ。

で、パリに着いたはいいいけど、ここ発のナポリ行きはもう全便欠航になってたわけ。夫がPCに張り付いて、翌朝のリヨン発ナポリ行きがまだ生きてるのを見つけて、この日の夜のパリ発リヨン行きと合わせて、即押さえたの。リヨンに夜中に着いて、空港近くのホテルで一息ついたんだけど、たった4時間の滞在に200ユーロとられたわ！ 頭にきて、翌朝4時に、ホテルから空港行きのバス停まで1kmくらい、スーツケース引いて歩いたの。ほら、空港周辺って、人気ないじゃない？ かつ、時間が時間だから暗いし、寒いし、人っ子一人いなくて、車もたまにトラックが通るくらいなのよ。私、その数日前まで、水着で海風に吹かれてたのよ？ 疲れも溜まってるから、『もしここで私になんか起こっても、行方不明になって、お終い』とか、変な事ばかり考えちゃってさ。始発の空港行きバスに乗れたはいいいけど、乗客は私1人で、運転手は胡散臭そうにこっち見るし。で、空港着いたら、閉まってるのよ！ 30分くらいで鍵を持った人が来たんだけど、それまでの心細さったらなかったわ。

空港に入ってちょっとしたら、予約してたナポリ行きが欠航になって、今度はインフォメーションに走ったんだけど、この時点で、この日リヨン発ナポリ行きで唯一欠航になってないイーージェットの便が『残席1』だったの。空港閉鎖とか出始めて、インフォメーションも結構な列だっ

たんだけど、まだ乗客は緊張感無くて、『欠航？なんで？ え、あの辺りでもコロナ？』って感じ。『とにかく今飛ばないと！』って焦りまくってるのは、私くらい。マスクしてたんだけど、フランスじゃこの頃まだ誰もしてなかったから、怪訝な目で見られたな。徐々に列が進んで、私まであと4、5人ってところで、カウンターのお客さんが、ナポリ便の空席情報を聞いた時には、『お願い、その席取らないで！』って本気で祈ったわ。その人が、結局この日は飛ばないことにしてくれたお陰で、私滑り込みでナポリまで自力で戻れたの。この時期夫が（同僚がコロナを発症したため）自宅隔離中だったから、つきっきりで私をフォローしてくれて間に合ったけど、そうじゃなかったら、どうなったか…」

「…ちょっと会わないうちに、何してるのよ！で、お母様は、そのまま島に？」

「うん。イギリスも状況厳しくなって、間もなく飛行機飛ばなくなったし、今のロックダウン真っ最中のロンドンなんか、便があったって彼女が戻るタイミングじゃないし。居住権持っていてくれたのが救い」

「そうじゃなかったら…非ヨーロッパ人に対する滞在期限の超過で、間もなく強制送還？」

「そう、私が残ってたなら、そうなったってこと！ま、その方が絶対去年よりましな旅だろうけどね」

.....

この話の続編用に、翌週お茶の席を設けることにして別れたが、その3日後、我が州の飲食店の店内でのサービスが禁止となり、この約束は先送りとなった。これが実現する頃には、彼女のお母様がロンドンでワクチン接種を済まされ、また彼女ならではの話が聞けることを楽しみにしている。